
異世界召喚された道化師（ピエロ）

葉藻阪 松園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界召喚された道化師ヒヨロ

【Zコード】

Z3276BA

【作者名】

葉藻阪 松園

【あらすじ】

異世界召喚された「ぐーぐーく普通の一般人である藤沢章が、子供の頃の夢であるサークルを創るために東奔西走しながら異世界を蹂躪する話。ある意味チート（呪い？）を貰った彼が、猫耳娘雑技団や魔法公演や魔獸共の猛獣ショーを創ろうとはた迷惑な方法で努力します。ヤンデレなダークエルフやドMな吸血鬼少女や厨二病を患つている火を吐くライオン達を伴つて彼が事件（犯罪？）を引き起こす。【注意】チート要素あり。少しシリアス気味で始まるけど、ご都合主義でハッピーエンド。最初は最弱だけど、だんだんチート

化 ちょっと前に投稿していたもの（異世界召喚された時の対処方
法）と世界観だけ同じです。2012年1月10日にタイトル変更。

プロローグ（前書き）

【注意】少しシリアルスリラー風で始まるように見えるけど、じつは都合主義でハッピーエンド。最初は最弱だけど、だんだんチート化。王道な異世界召喚もの。ちょっと前に投稿していたもの（タイトル同じ）と世界観だけ同じです。

プロローグ

着飾つた二人の男女と二つのブランコ。眩いばかりの電飾で、テントの内側に映し出された二人の影。

幻想的で森の中を思わせるゆつたりとして澄んだ曲がピタリと止むと、あいつとあいつの相方の手が向かい合つた二つの空中ブランコから同時に離れる。

観客全てが固唾を呑んで見守る中、一人は背筋を伸ばして回転しながら空中を移動する。

まるで止まつた時の中を一人だけが動いているかのよう。二人の距離は近づき、交叉した後再び離れ、あいつとあいつの相方は優雅に対面のブランコへとたどり着く。

二人がそれぞれのブランコの手をつかんだ瞬間、アップテンポの曲が流れだすと、観客が歓声を上げるのが同時だった。

確かにあいつは一番輝いて見えた。

隣で見ていた親子連れの女の子もポップコーンを食べるのも忘れて、ずっとあいつの演技には見とれていた。

俺もあいつから貰つたチケットを握り締め、久しぶりに子供の頃のように興奮していた。

もうすでに夜の帳は落ち、ライトアップされ熱気を帯びたサーラス会場を出た俺は、すぐさま最寄りの駅へと向かつ。

途中で信号に捕まり、なんとなく振りかえると如何にもサーラスだといつ白いテントがまだ視界に映る。

あいつと俺のこと藤沢章は、いわゆる幼馴染だった。

家が隣でよくあいつやあいつの家族と遊びに出かけた。海や山や神社やお寺に秘密基地。

あのサーラス団にもその時出会った。そりゃー年以上前の今日と同じように蒸し暑い夏休みに。

俺とあいつは、当然のように魅了された。

ただ俺とあいつの選択は、ほんの少し異なっていた。

俺はもう一度見たいと思い、あいつはあれをやりたいと決意した。

それだけの違いだった。

その時の俺はできるわけないと反対した。運動神経も俺とほとんど変わらないあいつにできるわけないと…。

おそらく一番の親友がいなくなるのが怖いと思ったのだろう。

そして、おそらくあいつに置いて行かれるのが嫌だったのだ。

まあ、その小物臭漂う感情は今ではほとんど無くなつた。

今ならはっきり断言できる。あいつの選択は間違つていなかつたと。

あの時のおいつの選択は。

もし、俺があの時おいつと同じ選択をしていたら、今の俺はもっと輝けていただろうか…。それは無意味な疑問だらう。

あいつと違つて、おそらく俺はこれからもこのまま何となく生きていくだらう。

挑戦を嫌つて、安全を優先して、生きていく。

これは俺の性格だから仕方ない。俺は石橋を叩いて、さりに他の人が通るのを確認してから橋を渡る人間だから。

確かにあいつが少し羨ましいが、これと並んで今の生活に不満はない。典型的な脇役キャラだから。

何かとんでもない事件に巻き込まれない限り、俺はおそらくいつもやつて生きていく。

異世界にでも飛ばされない限りは…。

そんな時だった。人生で最も重大で理不尽で幸運で不幸な事件が俺に降りかかったのは。

ただ、その時の俺は、突然光に包まれて、余りのまぶしさに目を瞑らざるを得なかつただけで、何が起こっているのか全く理解していなかつた。

プロローグ（後書き）

感想よろしく。

第一話・初めての奇跡と博愛神の加護

視覚が回復し少しづつ田代が慣れてくる。

周りの情報が入って来るに従って混乱していくのが自分でもわかる。

目の前にあつたはずのアスファルトの道路や車、そして向かいに見えてたコンビニやら全ての物がなくなっていた。

コンビニに入ろうとはしゃいでた子供も隣で一緒に信号待ちをしていたバカップルもみんな消えていた。

複雑にねじ曲がり、たがいに絡みあっている見たことのない異常に大きな木々がみえるだけだ。

そして、足元に血だらけの女と10mくらい先に黒いロープを羽織った奴が倒れているだけだった。

訳が分からず動搖する。

女は、黒髪で褐色肌の美人だと分かったが、耳が不自然に長く尖つ

ている。

空想上のダークエルフがいたらこんな容姿だろう。
現実離れした容姿に少し違和感を感じたためか、声をかけるのを一瞬躊躇わってしまう。

携帯電話を確認してみるが、なぜかというか、それとも、やはりと言えばいいのか、圈外だった。

とりあえず、不自然な耳への違和感より女の怪我の方が気になつて話しかけることにする。

「大丈夫か？」

自分でもなんて間抜けな質問だろうと思つ。

肩から腹にかけて大きく体が裂けて、血まみれだ。

大丈夫なわけがない。

だが、気が動転して他に言葉が出なかつたからしかない。

女性の脇にしゃがんでもう一度声をかけるが、美女の赤眼には生気がない…。

彼女の伸ばした手をおもわず掴む。

褐色の肌が激しく波打ち、血が傷口からあふれ出していく。
不規則で荒い呼吸が耳に纏わりつくように絡んでくる。

「誰かいないか？怪我を治せる人！－！」

思わず叫んでしまう。

声が周囲に木霊するだけで、誰からも返事はない。

あたりを見回すと、彼女の血がそこらじゅうに飛び散っているのに今更ながら気がついた。森独特の湿つた臭いに澄んだ空気は、日本の森と変わらない。ただ、血臭が混じっているため、不快感が刺激され、さらに混乱を加速させる。

そのとき、頭の中に突然声が響いてきた。

『異世界人である藤沢章の召喚を観測しました。

数奇の女神より奇跡ポイントが藤沢章に250ポイント贈られました。

召喚事故を観測しました。

嘲笑の邪神より奇跡ポイントが藤沢章に50ポイント贈られました。藤沢章の合計奇跡ポイントは、300ポイントになりました』

ハツとして周囲を見渡すが誰もいない。

”異世界人の召喚”とは、どういう意味だろうか。

そのせいで、俺はここにいるのか？

”召喚事故“ というのも聞き取れた。

そのせいで、彼女は怪我をしているのだろうか？

”合計奇跡ポイントが、300ポイント“。

何のポイントだろうか。

全く状況が掴めなかつた。

「誰かいるのか？いるんだつたら出てきてくれ！」

返事はない。

空耳だったのだろうか。

いや確かに聞こえた。それもほつきりと。

とても明るく、この状況に似つかわしくない澄んだ声が。

”嘲笑の邪神“ やら ”奇跡“ やらと、この状況でふざけた単語を並べてくる声がはつきり聞こえたのだ。

何もできない自分にも苛立つ。

しかもこの理不尽な状況をビリしたらいが分からない。

不満をどこかにぶつけたくなつておらに大声になつてしまつた。

「隠れてないで早く出てきてくれ！！

女神だとか、神だとか、くだらないこと言つてる間があつたら、怪我の治せる人のいる所まで彼女を運ぶの手伝ってくれ！

それとも、あんたが治療できるのか！」

するとすばぐさま、先ほどと同じ声が頭に響いた。

『藤沢章の願いに博愛神から返答がありました。

彼女の治癒には、奇跡ポイントが5000ポイントが必要です。

現在、藤沢章の奇跡ポイントは300ポイントであるため、奇跡を起こすことは不可能です。

ただし、藤沢章が”博愛神の加護”の付加を了承するのであれば、奇跡ポイント200ポイントの支払いと、彼女の治癒の奇跡を行なうことがあります』

何を言つてゐるのか未だに訳が分からぬ。

しかし、治すと言つてゐる。

博愛神の加護の付加を了承すれば、治すと言つてゐる。
奇跡ポイントとやらを払えば、治すと言つてゐる。

そのことだけは理解できた。

褐色女の手が小刻みに震えているのに気が付く。

このままだと、長く持たないのは目に見えている。

当然俺の返答は決まっていた。

「女神だか神だか何だかわからないが、治せるなら早く治してくれ！」

大声で叫ぶ。こんなに大声を出したのは、何年ぶりだろうか。

普段は大声を出さないせいいか咽そうになるのを感じると、再度、どこからともなく頭に声が響いてきた。

『藤沢章の願いを受諾しました。

対価として、藤沢章に博愛神の加護が付加されました。

さらに対価として、藤沢章は奇跡ポイントを200ポイント支払いました。

藤沢章の合計奇跡スコアは、100ポイントになりました』

そんなアナウンスと同時に、腕の中の褐色女が突然光り出し、まぶしくて思わず目をつぶってしまう。

目をゆっくりと開けると、だんだん目が慣れてくる。

完全に視覚を取り戻すと、褐色女の傷が完全に塞がり、静かに寝息を立てているのに気がついた。

自分に今何が起こっているのだろうか。

未だに理解できない状況だ。

ただ、褐色女の怪我が治ったのを確認して、俺の心も落ち着いたのに気がついた。

少なくとも今の状況をとりあえず整理しようと思えるくらいには、冷静に戻れたようだつた。

第一話・奇跡ポイントと小さな決意

褐色長耳女の傷が完全に塞がり、田の前で寝息を立てている。

よく見ると、怪我だけではなく、服についてた血も跡形もなくなつており、拳句の果てに、破けてた服まで直つてあるようだ。

周りを見渡したが、彼女と倒れている胡散臭い真っ黒のローブの奴以外誰もいないようだ。

しばらく観察すると木の間を駆け抜ける影を見つけたが、どうもウサギっぽいものらしい、しかし害意はないようだ。

ウサギっぽいものとこつのは、頭のてつぺんが鱗でおおわれてて帽子みたいになつてるから、ぽいものって表現しただけで、帽子ウサギって呼んだ方がいいかもしない。

明らかに地球産ではないことが分かる。

3mくらいの高さにジャンプでき、枝から枝に飛び移つてゐるのだから。

それから、時たま遠くから悲鳴とも鳴き声とも分からぬ音が聞こえたときには、心臓が停止するかと思ったが、少し混乱しつつも無理やり落ち着かせた後、明らかに捕食される側のように見える帽子ウサギがうろついている間は大丈夫と勝手に判断することにする。

それにしても俺に何が起つていいんだらうか。
未だに意味がわからない。

とつあえず俺は今の状況を整理することにした。

異世界であることはほぼ確定だらう。

自称神様の言ひことを信じるなら、異世界に召喚されたつてことになる。

召喚事故つて言つたからには、この長耳の褐色美女はそのせいでは怪我をしていた可能性が高い。

そして、祝福ポイントとやらを払つたから自称神様が彼女の怪我を治してくれたみたいだ。

一番気になるのは、奇跡ポイントとは何なのかといつことだ。

経験値みたいなものなのだろうか。

召喚事故されたという訳のわからない理由で数奇の女神と嘲笑の邪神とやらが勝手にくれて、怪我の治すのに博愛神とやらに無理やり払わせられた感じだが…。

博愛なら対価とりざなに勝手に直せよと愚のほ、俺だけではないはずだ。

その時ついでに”博愛神の加護”といつのも意味分からぬたようではあるが…。

しかしその”博愛神の加護”といつのも意味分からぬ何かいこことあるのだろうか。

まあ、誰かに聞けばそのうち分かるだろう。

この美人な長耳お姉さんが教えてくれると嬉しいんだが…。

調べなくてはならないことで山積みだ。
さて、これからどうしようつか?

『藤沢章の願いに知識神から返答がありました。

この世界の全ての理を知るためにには、奇跡ポイントが5000兆ポイント必要です。

ただし、概要だけであるなり、奇跡ポイント5ポイントであなたの知りたいこの世界の概要をお教えすることです』

また、脳内神様が声をかけてきた。

「やあのことを見張っているのだろうか?」

とりあえず、5ポイント払つ」とこじてこの世界のことを聞くことにする。

分かつたことは、次の四つだけだった。

1・「これは、トルマニアン帝国の幻影の森。

2・奇跡ポイントは、神様が気にいることをするともらえるらしい。
しかもいろんな神様がいる。

3・奇跡ポイントを消費すると、奇跡が起こせるらしい。怪我治したり、スキルを覚えたり。ちなみに、魔法もスキルに入る。その奇跡に奇跡ポイントがいくらかかるのかを聞くだけならタダみたいだ。

1はこの際置いておこう。

とりあえず、突っ込みたいのは、2だ。

異世界召喚が気について”数奇の女神”が奇跡ポイントをくれたのはいいとして、召喚事故観測したからってポイントくれた”嘲笑の邪神”は一体何がしたいのか？

悪趣味としか言いようがない。本当に神様なのか？

ただ、3に関しては心躍るモノがある。そう、奇跡ポイントでスキルを覚えられる。

いろいろ試したところ、全ての魔法使えるのに500億ポイント、全ての火魔法なら50億ポイント、マッチ程度の火を起こす魔法は50ポイントのようだ。残り95ポイントしかないのに興奮して使ってしまう所だった。

魔法以外のスキルを試したところ、魔獸使いに必要な全ての能力が50億ポイント、目の前ではねて飛んで行ったあの帽子ウサギ一匹

に限定した魔獣使いの能力だと50ポイントで取得可能とのことだつた。

ちなみに、ピエロに憧れていたので、ボール乗りを聞いてみたら50ポイントだつた。

今は奇跡ポイントは95ポイントしかないので、どうしようかしばらぐ歎み、とりあえず、長耳女士さんが起きて話を聞いてから、もう一度考えようと結論付けた。

この時に、一つの決意が、人生で初めて俺の心の中に芽生えたことを、俺は後々気がつくことになった。

この世界で、サークス団を結成してみようという決意が。

異世界に召喚されたことで気分が高揚していただけかもしれない。魔法が使えることにテンションが上がつていただけなのかもしれない。

しかし、この世界では、ほんの少し挑戦をしてみようど、自分でも意外だが思うようになつていた。

ほんの少しだけ、ほんの一欠けらの決意だったが、確かにこの時芽生えたようだつた。

第三話・漆黒の美女と言語神の加護（改）

「う、うへへ」

長耳な褐色お姉さんから呻きが聞こえてくる。目鼻立ちの整つたいわゆる典型的な褐色美女には、似つかわしくないかわいい呻きだ。

少し心がいやされて、心が落ち着いてくるのが自分でもわかる。

これからは、『長耳さん』と、さん付で呼ぶことにある。

褐色の肌に漆黒の長髪。スッとした鼻に、そして、先ほど見つめられた？時に見えたくくりつとした緋色の目。

その中でも、黒髪は特別目を引く。あまりにも黒いのだ。今まで日本人は黒髪だと思っていたが、彼女の髪を見てしまふと黒髪とは言えなかつたのだと思えてしまう。彼女の髪に近づくとまるで全てのものが吸い込まれていくブラックホールなのではないかと錯覚してしまうくらいに、鮮やかな黒なのだ。

その髪の中からぴんと突き出した特徴的な尖つた耳に思わず触つてみそうになるのを何とかこらえる。

服装に目をやると、どうやら上着とも革製のよつだ。いわゆるレザージャケットとレザーパンツに一番近い気がするが、ジャケットは半袖だったりとデザインは少し違和感がある。

スタイルは、日本人離れした滅茶苦茶いい体で、レザージャケットは一部がはちきれそうになつていて、

まあ、日本人ビックリか地球人ですらないだろ？が…。

それにもしても、はち切れそうな部位は、すいかとは言わないが、メロンくらいはあるようだ。

そんな邪なことを考えていたためか、いつの間にか俺の手が彼女の胸を揉んでいることに気がついた。

一瞬自分が何をしているのか理解ができなかつた。

気がついたら彼女の胸に手が伸びていたのだ。

全く意味が分からぬ。

いくらむつりとはいへ、寝ている女の胸を揉むとかあり得なかつた。

そんな度胸のある奴ではないことが自分が一番良く知っている。

どうしてしまったのかと混乱しているためか、すぐに手を離すという判断に遅れが生じる。

異世界召喚で体に変化が生じたのかと答える出ない思考を巡らせてみると、ピクリと長耳女さんが反応したのに気がついた。

どうやら彼女が目覚めたようだ。

俺の手が彼女の胸を揉んでいることを確認した瞬間、人も殺せそう
な鋭い殺気を向けてくる。

長耳さんが引きつった笑いを見せながら、俺の頭に手を伸ばして
くる。

細くて綺麗な手だと全く関係ないことを考えながら現実逃避して
いるうちに、彼女の手が俺の顔面を驚撃みにする。どうやらアイア
ンクローというプロレス技で俺に制裁を加えるようにしたようだと、
最初は人ごとのように考えていたのだが、痛みで思考を遮られる。

長身の美女が立ち上がりながら、アイアンクロー状態で俺を無理や
り持ち上げる。

' s d o i u o u a f a j j j a o j f a o j f a j o a
i j o d i j f a o i j f a o j o a j o f j o a j o a f
j f o j a s d f k f c z p v f j a d e i f j e i a o f j
a o j'

美女がアイアンクローしながら喋つてくるのだが、何言つてるのか
全くわからない。

分かったのは、アイアンクローの力が半端じゃないことだけだ。

女の細腕なのが、滅茶苦茶力が強い。

こんなことで再確認したくなかったが、ここはやはり異世界のようだ。

俺は足が浮いた不安定な状態で謝つているのだが、全く言葉が通じない。

俺は、命の恩人のはずなのが…。

まあ、眼が覚めたときに胸揉んでる男がいたら、普通は犯罪者だと思うだろう。

少なくとも命の恩人とは思わない。

牢屋ではなくあの世に直行させられそうな勢いだ。

痴漢行為で返りうちされた場合は、天国に果たして行けるのだろうか。

まあ、”嘲笑の邪神”という訳分からん存在がいるんだから、”痴漢の邪神”とかも居てもおかしくはない。

天国行きは大丈夫だろう。

邪神が天国にいるか分からないし、そもそも脳内神様かもしけないが…。

とりあえず俺の頭がい骨が限界だ。

さっきの脳内神様に喋れるようにしてもらえないのか。

あの怪我治せるんだつたら、大丈夫だよな？
大丈夫のはず…。

そんなことを考えて『いるとすぐ』に返事があった。

『藤沢章の願いに言語神から返答がありました。

公用語ドーマ語スキルの付与には、奇跡ポイントが1000ポイントが必要です。

現在、藤沢章の奇跡ポイントは95ポイントであるため、奇跡を起こすことは不可能です。

藤沢章が”言語神の加護”の付加を了承するのであれば、奇跡ポイント50ポイントで公用語ドーマ語スキルを付与してくれるようですが

「ああ！ああ！何でもいいからそれで！
早く謝らないと、俺の頭が持たない！……」

『藤沢章の願いを受諾しました。

藤沢章に公用語ドーマ語スキルが付与されました。

対価として、藤沢章に”言語神の加護”が付加されました。

さらに対価として、藤沢章は奇跡ポイントを50ポイントを支払いました。

藤沢章の合計奇跡ポイントは、45ポイントになりました

「もう一度とおいたができるねえように私が手術してやるよ。
方法はとりあえず二つあるんで、ウジ虫のお前に特別に選ばせてや
る。

てめえの腐った右手をゆっくりじっくり蟲血虫に食われる方法と、

その腐った脳みそを頭搔つ捌いて、聖水で消毒する方法だよ。
好きな方選びな！」

最初に理解した異世界言語は死刑宣告だった。

言葉が分かれば、人間だれしも分かりあえるよな?
彼女が人間かどうかはまだ分からないが…。

第四話・不気味な美人と不気味な微笑（改）（前書き）

2012年1月10日に改定しました。

第四話・不気味な美人と不気味な微笑（改）

とりあえず彼女の誤解をつくことに成功したようだ。
ただ未だに警戒して少し離れて喋っている。

胸を揉んでいたのは誤解でもなんでも無いから仕方がないが。

美人のお姉さんとマンツーマンでお話できる日が来るとは思いもし
なかつた。

まあ、お姉さんというより姉御つて感じなんだけどな。

しかもヤンデレ。テレってはいないが、病んではいる。

何が言いたいかと言うと、彼女は本当に口が悪い。

最初は怒りで言葉が汚くなつてたのだと思ったが、どうやら素で口
が悪いようだ。

この世界の人にとっては当たり前なのかもしれないが、さつきから
俺の纖細な心臓が悲鳴をあげている。

しかも、時折見せる笑い顔が本当に気味が悪い。

美人がにやけながら毒を吐いてるせいなのか、俺の心の中で拒否反
応が起こっている。

最初に笑顔見た時、背筋が凍つた。凍つたという表現が正しいかど
うか分からないが、普段意識していない背中の感覚器官の感度が異
様に上昇して、冷たいという情報を脳に発信しまくつていた。

それでも浮世離れした美貌のせいで嫌うことはできないのだが。

美人でなければ、いくら痴漢した負い目があるとはいえ今頃俺は切
れていただろう。

彼女の名前は、加奈さんといつよひだ。

本名は、加奈・ヴァレンダン・夏田つて名前らしいからやつ呼ぶことにした。

なんか日本人のハーフみたいな名前だな…と思つたら、大和国人の父親と闇の妖精族の母親の子供のこと。

それとやはりと言えばいいのか、異世界らしくダークエルフで合っていたようだ。

そんなわけで、今はそんなことよりハスキーボイスでヤンデレ？な姉御と重要なお話し中だ。

「で、ウジ…、くそ虫は異世界から来たと…」

なぜ言い直すのか分からぬが少し評価を上げてくれたのだろうかと勝手に好いように解釈して肯定する。

「おめりぐく

「くくっ、顔は平平凡凡、体も風折草より貧弱で、何の取り柄もなくそ野郎なわりに、境遇だけは変わってるね

痴漢した俺が悪いからこのくらい言わるのは仕方がないと、とりあえず自分に言い聞かせて、平静を装つてスルーすることにし、話

を続ける。

「なんで俺ここにいるか分かる?」

「おんじりぐ、その胸の小さいお嬢ちゃんが召喚したんだろ」

「お嬢ちゃん?」

「あそこに戻がっているアバズレだよ」

余りにも怪しかったので放置していたロープが少女だと知り、慌ててロープに近づく。

地面と見分けな着かない黒色のじつじつしたロープに近づくと、柑橘系の香水か何かの匂いがする。

どうやら本当に女性であるようだった。

俺は初めての異世界召喚体験中で気が動転していたので、すっかり忘れていたのは不幸な事故で仕方がないということと、うつぶせの少女には許してもうことにする。

黒いロープ羽織っているから女の子かどうかまだ確定してはいないが…。

いつまでも地べたに口づけはかわいそうなので、ひっくり返してあげることにした。

ロープを持ってひっくり返すと、どうやら、スレンダーな少女であることが分かる。

スレンダーというのは、軽いことから判断した。
決して、胸を触ったわけではない。

異世界人だからといって、体重が重い訳ではないようだ。力は遙かに強かつたが。

未だにこめかみがジンジンする。
アイアンクローから解放されてだいぶ経つのだが…。

顔が見えたことから、ロープの女は17歳くらいの少女である」とも分かった。

透き通る白い肌。ロープから覗く真っ赤な髪。細身でそこそこ長身の少女だ。それから、ピンクのかわいい小さな唇に小さなつんとした鼻。おそらく相当もてるだろう。

異世界のかわいい基準は分からないうが、地球では100人いたら99人はかわいいと言うはずだ。

100人といわず99人にしたのは、知り合いに1人かなり偏った趣向の友人がいたからで、特に深い意味はない。

ロープを羽織つてるので、尻尾はあつても分からないが、加奈さんみたいな長耳ではないようだ。

残念ながら、少なくとも猫耳はなかつた。

フード被つていたのになぜ分かるのかと質問がありそうだが、頭のフードを一旦取つて確認したのだ。

エルフがいたんだから、猫耳娘がいるかもと少しだけ夢見てしまつたのは、仕方がないだろう。

フード取つて得られた情報は、やはり美少女だと「う」とくらいだ。異世界で会つた二人が二人とも美人つて異世界に来てよかつた。それとも自称神様が主人公補正でもくれたのだろうか。

あと、メチャクチャでかいサングラスをかけたメチャクチャ怪しい少女であることも分かつた。

なんで、こんな大きいのをつけてるのだろうか。

流行つてゐるのか。

それとも有名人だつたりするのか。

異世界センスは理解できない。

そんなことを考えていると、自分の手が少女の胸に置かれているのに気がついた。

まだだ。

また、いつの間にか揉んでいた。

何をとは言わないが、加奈さんより少し自己主張の足りないふくらみを揉んでいた。

俺はいつたいどうしたんだらうか？

「これは傑作だね。」
くそ虫は、もしかして”博愛神の加護”持ちか

混乱している俺に蔑んだ目を向けながら加奈さんが質問してくれる。

「加奈さんが知ってるってことは、奇跡ポイントについては、誰でも利用できるシステムのようだ。

どうやら脳内神様でも自称神様でもないらしい。

「えつ、知つてんの？」

加奈さんの治療の対価に”博愛神の加護”を付加せろつて、突然頭に声が響いてきて…。

”博愛神の加護”って何なの？」

「くそ虫が直してくれたのかい。どうせひきの糞虫じやあないみた
いだね。礼を貢つよ。

加奈さんが一瞬目を見開いたように見え、その後、狂ったように笑いだす。

何がそんなに可笑しいのだろうか。
美人と言えどさすがに引く。

「いえいえ。困った時はお互い様なんで」

頭を振りまわしながら笑い続ける相手に聞こえているかどうかは分からないが、無難な返答をしておく。

しばらく笑い続けた後、少し落ち着いたのか、息を整えながら加奈さんが話しかけてきた。

「はっ、はっ、はっ、はっ、ひっ、ひっ、ふっ、ふっ、はー、ふー。

糞虫は、腐った変態というより、逝かれた変人のようだな。

私の体見ても何とも思わないみたいだしね」

体とはどういう意味だらうか。

体より言葉の方が俺の心を壊しているのだが……。

こっちの世界では気にする容姿なのだろうか。

もしかして長耳のことかな……。

多少の欠点など美人ということの前には、些細なことだと思つのだが。

むしろ、欠点があつた方が可愛く見えたりする。

加奈さんが興味深そうににやけながら少しこちらを観察した後、思い出したように加奈さんが話を戻す。

「そりいや、くそ虫の”博愛神の加護”のことだけど……」

明らかに笑いを堪えよつとしている加奈さんが言葉を続ける。

「おそらくいつの間にかセクハラしてしまった加護だよ…」

加奈さんは、いやけながらいからいの反応を伺つてゐるよつだ。
俺は彼女が発した言葉に理解が追いつかず、少し固まつてしまつて
いた。

第五話：“加護”のマイナスと彼女がヤンキーな理由（前書き）

すいません。

本日（2012年1月10日）に第3話の最後と第4話のほとんどを改訂しました。

キャラが薄すぎると言われて、それもそだなど、加奈のキャラをヤンデレ?に変更しました。

改定版（特に第4話）を読んでいないこの話から意味が分からなくなると思われます。

ご迷惑をおかけします。

それからお気に入り登録してくれた方ありがとうございます。

では。

第五話：“加護”のマイナスと彼女がヤンケレな理由

「加奈さん。もう一度言つてくれないか？」

異世界召喚のせいで、耳が悪くなつてゐるみたいだ…」

セクハラの加護という幻聴が聞こえてしまつたようだ。
異世界召喚つて怖いな。

「いつの間にかセクハラしてしまつた加護だよ。

加護が発動する条件や効果は、個々で違つみたいだから、細かいこと知りたけりやあ、くそ虫が知りたいつて願えば答えてくれるよ」

聞き間違えではなかつたようだ。

深呼吸して、加奈さんのアドバイス通りに自称神様に尋ねると、心中で質問するとすぐに答えが返つて来る。

『藤沢章の質問に博愛神から返答がありました。

藤沢章に付加されている“博愛神の加護”とは、女性をかわいい又は綺麗だと思ったときに、女性特有の部位をいつの間にか撫で回してしまつ加護です。

なお、相手への魅了の効果は、一切含まれておりませんので気をつけるようにとのことです』

無情なアナウンスが頭に響いてきた。

かわいいと思つた瞬間に撫で回してるとか。

どうやら俺は町を歩くことすらできなにようだ。

一体どの辺が加護なのか神様に問い合わせたくなる。

そういえば、言語神の加護も貰つてたよな。

そつちは大丈夫だろうか？

言語神といふことは、誰とでも話せるようになる加護だとうか。

そうすれば、魔獣とも話せるし、もしかしたら簡単に魔獣使いになれるかもしれない。

そしたら、俺でもこの世界でサークルが開ける。

「しかも、言語神つてことだから、喋ったことが現実になる言靈の効果もあるに違いない」

『藤沢章の質問に言語神から返答がありました。

藤沢章に付加されている”言語神との加護”は、考へていることを思わず喋ってしまう加護のことです。

妄想している場合に高確率で、口から洩れてしまします。

しかも、妄想が増大されるという特典付きとなつてゐるようです。

また、妄想が実現することは一切ないので気をつけるよつとのことです』

どうやらこちらの神様は、マメに返答してくれるらしい。
余り聞きたくない答えだったが…。

もう一つも役にたないどころか、害にしかならない加護のようだ。
特に妄想増大がいらない。

加奈さんもいつの間にか憐れみの表情になつてる。

どうやら”言語神との加護”についても何か知つてゐるみたいだ。

まあ、さつき思いつきり妄想口走つてしまつたし、こんな訳の分からぬ加護が存在していたらみんな知つてるだらうしな。

よくよく考えれば、対価として付加されたんだから、役に立つ加護なわけない。

数分前の浮かれてた俺を殴つてやりたい。

それにもしても、神様は、なんでこんな意味の分からぬ加護を創つたのだろうか。

理由分かつたところで俺には関係ないだろうが…。

そういうえば、人によつて効果が違つたことは、もしかして…。

「加奈さんも言語神の加護を？」

一瞬驚いた表情を見せた加奈さんだが、また、背筋の凍る笑みを浮かべた後返答していく。

「ウジ虫のくせに、いつぱしの思考ができるみたいだね…。

そうだよ。私も”言語神の加護”持ちさ。

ただし、私の加護は、人を不快にさせる言葉を発してしまうってものだけだ。

加護で私の笑つた顔も不快に感じるようになつてるみたいだし、その上、沈黙していると強制的に不快な笑顔になつてしまつ特別仕様を、偉大で気がきく神様はつけてくれたようだよ」

どうやら、加奈さんの口が悪さと不気味な微笑みは加護のせいらしい。

加奈さんもかなり苦労していそうだ。

かなり笑顔が引きつっている。引きつっているのは加護のせいかもしないが、今の俺には判別できない。

とりあえず、俺の異世界人生はマイナスからのスタートになりそうだということだけは理解した。

第五話：“加護”のマイナスと彼女がヤントレな理由（後書き）

途中での変更で「迷惑おかけしました。」

第六話・召喚事故と赤髪少女

「いつまでイジケルてるつもりだい？」

軟弱なのは、体だけじゃなく心もなのかい？」

しばらくして、悪いと思ったのか、いつの間にかにやけ顔ではなく
なった加奈さんが声をかけてくれた。

いじけた俺の精神が回復するのをしばらく待つていてくれたようだ。
さすが姉貴だ。

ただし、彼女の言葉でさらにもう一度傷を負つてしまつたが。

「ああ…。

そういうば、なんで怪我を？」

とりあえず、話題を変えようと思つて切りかえす。

これ以上精神に負担をかけたら鬱になりそうだ。

召喚の失敗で怪我してたのだろうと予測をしてはいるが、もし敵が
いるのだとしたら危険であると判断し、一応加奈さんに尋ねること
にした。

「そのクソガキが私に向かつて召喚をかけてきたんだよ。

普通、召喚つてのは、何もない空間に向かつてするんだけどね…。
まあ、時空のひずみか何かで体が裂けてしまったんだろうね」

ここにきて新たな事実判明する。

「どうやら赤髪美少女が加奈さんのいる場所へ故意に俺を召喚したせいで、怪我をしていたようだ。

召喚の失敗ではなかつたらしい。

それにしても加奈さんは、殺されかけてたのにノリが軽い。異世界では常識なのだろうか？

「召喚って危険なのか？」

「おやおや、やつぱり頭にウジがわいているのかい？」

普通はそんな使い方するわけないだろ。

召喚には奇跡ポイントもかかるし、特に異世界からの召喚なんてかなり対価を払わされるだろうから。

普通の攻撃魔法なら、一度覚えれば奇跡ポイントもいらないし、対価の要求もないし、そっちの方が遥かに効率がいい。脳みそ持つてりや誰でもわかることだろう？」

加護のせいだと分かつていても、美人に悪口を言われると少しつくむ。

深く考えずに話を続けることにする。

「どうして召喚を？」

「私が知るわけないよ。会ったのも初めてだし、いつちが聞きたいくらじだ」

「いや、加奈さんと赤髪少女は知り合いではないらしい。

それでも見知らぬ他人が突然攻撃してくるとは、ここは危険な世界だと改めて認識する。

「そういえばこれから行く所もないなら、私の家に来な?

それとも、この森で野たれ死にたいかい?

ウジ虫がいくら野たれ死のうがどうでもいいけど、臭い死体を私の活動範囲で晒されると不愉快だからね。

特別にウジ虫を飼つてやるよ。

それに、ここがどんな世界か知つといった方がいいだろ?」

異世界で最初に出会った人が加奈さんみたいな人であることにほんの少しだけこの世界の神様に感謝する。

加奈さんはいつの間にかセクハラも許してくれたようだ。
口は悪いけど。

「いいのか?」

「ああ。もちろん。それじゃあ、その雌豚を私の家まで運ぶの手伝
いな!」

加奈さんは赤髪少女を指さしながら、家まで運ぶのを頼んできたので、危険はないのかと疑問に思つて質問をする。

「殺されかけたのに、大丈夫か？」

「ああ、餓鬼は餓鬼で使い道があるからね…」

加奈さんの赤眼が舐めまわすように、赤髪少女の肢体に視線を這わす。

何をさせるつもりなのだろうか…。

俺は、ついてく人間を違えてるのかもしれないようだ。

第七話・魔法と奇跡と少しトレ?

赤髪少女を担いで加奈について行く。

加奈と呼び捨てにしているのは、一緒に来るのならそう呼んでくれと頼まれたからだ。他人行儀は嫌らしい。ちなみに加奈の呼び方もウジ虫からあんたに格上げされたようだ。どうも相手に対する猜疑心の大きさで呼び方が勝手に変化するらしい。初対面の男は大抵ウジ虫になるようで、何とも微妙な加護であることを再確認した。

突然飛びさしてくる当たつても全然痛くのない角の生えた蛙をよけつつ、しばらくは巨大な木々の間をすり抜けた後、背丈より高く意外にもろい乾割草とうとうらしい茂みをなぎ倒しながら草原を進んでいく。

再び森林に入り、少女を担ぐのにも、物珍しいこの世界の風景にも慣れてきたので、この世界のことについて加奈に質問することにする。

通貨やら風習やらと他にも加奈に聞かなければならないことはたくさんあるが、どうしても最初に聞きたいことがあった。

それは魔法についてのことだ。

折角の異世界だ。これを聞かねば始まらない。

単純に使ってみたいと言つもあるが、サークスでのマジックショーにはあると全然違うだろう。

それにサークルがすぐに開けず他の職に着いたとしても、おそらく必要になって来るだろう。

加奈を見て分かったことだはあるが、どう考へても体力的には俺はこの世界の人と比べて劣っている。格闘技の経験もないのに、何か不測の事態があつた時に少し不安が残る。

そういうことに對処するのには、魔法しかないだろう。

そういう結論に至り、加奈に聞くことにする。

「魔法とスキルは何が違うのか？」

「うん？ 魔法？」

まあ、暇だから特別に教えてやるよ。ただし、一度しか言わないから、その貧相な脳みそに氣合で詰め込みな！

魔法つてのは、スキルの一種だからね。

光、闇、火、水、土、風の精霊神様を6大精霊神つて呼ぶんだけど、6大精霊神に關係するスキルを魔法つて呼ぶだけだよ。

だから、スキルと同じように奇跡ポイントで覚えられる。いくら異世界人とはいえ、そんくらい持つてるだろう？

精霊や妖精族は、もともと使えるけどね。

あんたの場合は、使いたい魔法を願えば、魔法を取得できるよ。

それで、一度取得した魔法は、制限がなければいくらでも使えるよ

うになる。

分つたかい？」

「じゃあ誰でも魔法を？」

「誰でもつてわけじゃない。
魔法の取得ポイントは高いし、普通の人は、裁縫スキルとか料理スキルとかにポイント使ってる。
私みたいにな」

加奈が普通と聞いて少し戸惑う。異世界の人は超人だらけなのだろうか。

疑問が顔に出たのか加奈が話を続ける。

「まあ、私の場合長いこと山の中で一人で生活してたから、多少身体強化にもポイント使ったよ」

どうやら、それで力が強いようだ。

ということは、俺も身体能力無双できるのだろうか？

「どのくらい」ポイント使つたら俺は加奈ぐらい強くなれると思つ？」

しばらく考えてから加奈から返答がある。

「うーん。あんたには無理だろうね。

私は高貴な闇の妖精族だから元々身体能力高いし、身体能力の強化にかかるポイントも少なくて済むからね。

平凡な通常人には無理だと思うよ。あんたは異世界人だけど、通常

人と体力的にも変わりなさそうだし…。いや、それどころか、あんたはライオン族のくしゃみで吹き飛びそくなぐらい貧弱だし、何の取り柄もない通常人より軟弱に見えるね」

だんだん加奈の口の悪さに対するスルースキルが身についてきたようで、重要な所だけ聞きとれるようになってきたような気がする。とりあえず、気になったのは、ポイントが少ないとはどういう意味なのかという点だ。

人によつて違うことなのだろうか。

「ポイントが少ないっていつのは？」

「例えば、私は選ばれた闇の妖精族だから、戦乱の神や闇の精霊神には気に入られていて、それに関係するスキルの取得にかかるポイントは少ない。

けど、くそ忌々しい光の精霊神には嫌われているせいか光の魔法に関係する魔法の取得は難しい。

取得するためのポイントが高すぎてね。

何の特徴もない通常人の場合は、どれも平均的な覚えやすさだけどね。

異世界人は分からぬがね…」

なるほど、種族によつて覚えやすいスキルとそうでないスキルがある。

ポイント少なくして、強力なのがいいな…。

異世界人は何か得意な物はあるのだろうか。

「なんだ？もしかして、冒険者になるつもりかい？」

やめといた方がいいよ。

毎日知り合いが一人は死んでいく危険な職業だ。

猫より貧弱なあんたにその才能があるとは思えないね」

「そういう訳ではないが、いつまでも加奈の世話になるわけにはいかないからな…。

それに普通の職業でも一つぐらい攻撃スキル持つてないと、この世界は危なそうだ」

見知らぬ他人がいきなり攻撃してくるぐらいだからな。

「そりゃ…。

でも魔獣を倒せるくらいの攻撃スキルってのはすぐに覚えられるわけじゃない。

一人前の冒険者の使う攻撃スキルは約100ポイント、そこそこ有名な冒険者は200ポイントくらいスキルにつき込んでるらしいね
。 。 。
。 。 。

悪かったね…。

あんたに下劣で下等な下心があつたとはいえ、私を治すのに200ポイントも使わせてしまつて…」

加奈はポイント使つたのをずいぶんと氣にしているようで、申し訳なさそうにこっちを見てくる。
相変わらず口は悪いが…。

200ポイントは、結構なポイントだったようだ。

「ここまで親切？してくれるのは、そのためだらうか？」

まあ、必要経費と思つて200ポイントくらいで諦めよ。異世界情報を一日田でかなりゲットできたし、口は悪いが美人と知り合えたしな。

ポイントなんて、また貯めればいい。

とつあえずどこのへりい時間がかかるのか聞いておくべきだと考え質問する。

「奇跡ポイントって貯めるの?、どこのへりいかかる?」

「一流になる冒険者は、1年かけて10ポイント貯めてると聞くね。もちろん、どのくらい神様に気に入られることをしたのかで、年数は変わるけどね」

一年で10ポイント?

そんなにかかるものなのだろうか?

そこそこ有名な冒険者のスキルが200ポイントだから、20年...いや、52ポイントあるから、後15年くらいか...。

普通にやついたら、今すぐ、俺無双は難しそうだ。

何とか裏技はないのだろうか?

とにかく、その間、冒険者の奴ら何してるんだ？

「スキルが手に入るまで、冒険者は何を？」

「そりゃあ、冒険者だね。
最初に、簡単で発展性のあるスキルを考えて、それを10年かけて
強化していくんだよ。

そうすれば、ずっと冒険者をやれるし、スキルポイントも無駄にな
らないからね」

なるほど……。

冒険者は脳筋だと思っていたが、いろいろ考えているようだ。

「速く覚える方法はある？」

「はー。

その足りない頭でちょっとは自分で考えな！
私が海より広い心を持つていてよかつたね。

今回は教えてやるから、耳かっぽじってよく聞こときな

よく加奈を観察しているとだんだんわかつてきたが、口は悪いが顔
が申し訳なさそうに少し引きつっているようだ。
まあ、好きで悪口言つてる訳ではないから当然かもしけないが……と
そんなことを考えながら、加奈の話の続きを聞くことにする。

「スキルに多くの制限をかける方法があるよ。

年に一回しか使えないとか、10分間詠唱時間がかかるとか…。

そういう制限をかけられれば、比較的小さなポイントでそこそこの強力なスキルを最初から覚えられるからね。

冒険者の場合は、そういう制限を最初にかけておいて、ポイントがたまつたらポイントを使ってどんどんその条件を無くしていくって方法をとるんだよ。

どちらの方法が早く使いものになるかは、スキル次第だろうけどね

「一年一回か…。

まあ、命かかった時の必殺技みたいな感じか…。

10年後か20年後には、制限を取つ払えて何回でも使えるようになるわけか…。

「他に裏技見たいのあつたりとかは?」

「裏技かい?

姑息なあんたらしい思考だね。

誰でも知つてることだが、神様に入られるつて意味では、加護持ちになるつて手もあるね。

あなたの場合、”博愛神の加護”と”言語神の加護”を持っているから、博愛神と言語神に関係するスキルはかなり取得しやすいはずだよ

なるほど。いいことを聞いた。

加護持ちだとそれ系の能力の取得ポイントが少なくて済むのか。

だが、博愛神と言語神は攻撃スキルがあるのだろうか。

「加奈は、博愛神と言語神の攻撃スキル知ってる?」

「直接攻撃スキルは、余り聞いたことないね。

博愛神の加護持ちで有名なのは、昔いた伝説の神父兼冒険者のガレニア・レバンドフスキーの拳闘友愛っていうスキルが有名だけだね。何でも半径100メートル以内に存在する武器がすべて破壊されて、攻撃スキルもすべて無効化されるとんでもないスキルだったらしいよ。

殴りあいで何でも分かり合おうとした腐った思考の変態神父だったらしいね。

まあ、その変態神父はライオン族の獣人だったから何とかなるスキルだけど、病人より貧弱なあんたが使っても殴り倒されて終わりだろうけどね

「博愛神使えないな。

そいつが一番有名ってことは、他の奴らはそれ以下のスキルってことか?

まあ、博愛神なんだから攻撃スキルあつたら困るよな。

「他にいる?有名な人」

「他にかい？うん。

確か50年くらい前に、言語神の加護持ちで確かアマラカス闘技場で序列3位までいった男が居たらしいね……。

まあ、余りにも下らない奴に思えたから、名前は忘れたけどね……」

闘技場で序列三位。

それは期待できるかもしれないな。

「どんなスキルだったんですか？」

「人格口撃と精神的外傷口撃トライアクトだつたかな？」

詳しく述べ分からぬけど、一対一では無敵だつたらしいよ。ただ、一度に一人にしか使えない制限があるらしく喧嘩は弱かつたようだね。

闘技場では最強だつたらしいが、そいつが一位になる前に観客から反対運動が起こつて首になつたけどね。よほど卑怯な奴だつたんだろうね。」

な、なるほどな……。

すごく微妙だ。

まあ、口撃つていうくらいだから、悪口言うだけの能力なんだろう。トラウマえぐるような。

格闘技見に来て、マイクパフォーマンスで決着が着いたらそら観客怒るよな。

というか、そいつ何のために闘技場行つたんだ。

「そろそろ、6大精霊神の加護の付加はやめておきなよ。

6大精霊神の加護は、全て10年以内に死んでしまうからね。

例えば、火の精霊神の加護は、加護持ちになつてからちょうど10年後に体が燃え尽きるって効果があるからね。

代わりに、少ない奇跡ポイントで強大な火の魔法を覚えられるらしいがね。

まあ、あんたが一匹燃え尽きるのはこの世界のためになるだらうから、無理に止めはしないけどね」

燃え尽きる…。

そこまでして、俺無双はしたくないな。

聞いておいてよかつた。

知らなかつたら、”火の精霊神の加護”なんて、もう主人公が持つてゐるような名前の加護だから無条件でOKしてたな。

もしかすると、俺のセクハラの加護と妄想の加護はましな方だったのかもしれない。

「加護つてなんでそんなにマイナスなモノばかりなんだ？」

「さてね。神様の考えることは分からぬが、人間がマイナスな加護をあえて欲しがるつてことは、それだけその神様を信仰してゐて証になるからぢやないのかい。

死をかけてでも欲しがるものは、特にね」

『いじわるしても信じてくれる人は、私を愛してくれてるってことね』ってことか？？

納得できるような。できないような。

なんか人間臭い神様だな…。

加奈がふと俺が背負っている赤髪少女に目を移す。

「その胸の小さいお嬢ちゃんはおそらく”火の精霊神の加護”持ちだろうね」

「この子が？」

「ああ。髪が真っ赤だからね？」

火の妖精族ならともかく、平凡な通常人でここまで髪が赤いのなら間違いないね

マジですか…。

この不可愛い顔して、とんでもないものに手を出しちゃるな…。

加奈の同じでヤンデレ化しそうだ。

俺のハーレム要員候補なのに大丈夫か？（【注意】完全な妄想です）

ふと、俺の耳に少女の息がかかつていて「気にづく。

かわいいな…。そう思つてしまつた。少女に背中に背負いながらも、できるだけ彼女のこととは考えないようにしていたのだが、少女の話を振られたせいでそちらに意識が向かつてしまつた。

気がついた時には、ローブの上から赤髪少女の太もも当たりを持つていた俺の手が、いつの間にか、彼女のお尻の方へ移動していく。柔らかいお尻へと。

背中に背負つているので赤髪少女は見えないから大丈夫だと思ったんだが。

どうやら”博愛神の加護”は対象が見えてなくとも、かわいいと思つただけでも発動するみたいだ。

それと、撫でまわしてしまう”女性特有の部位”っていうのは、胸だけでなくお尻も含まれるというが分かつたことも今回の失敗の収穫だ。

最初から、きちんと説明しとけよな。

まあ、しまつたと思いいながら、『マシユマロ並みに柔らかい』と妄想漏洩した瞬間、顎に加奈のアッパーをくらつたようだ。

パンチが消えるとつづのを初めて見た。見たというのは少し語弊があるが、おそらく加奈の位置的にアッパーだろうと予測しただけで、実際には顎に衝撃があつたのに気付けただけだ。
さすが異世界。

加奈は力が強いだけじゃないみたいだ。

『藤沢章の変態行為への懲罰で失神を観測しました。

嘲笑の邪神より祝福ポイントが1ポイント藤沢章に付与されました。
藤沢章の合計祝福ポイントは、46ポイントになりました』

意識が飛ぶ瞬間、そんなアナウンスが聞こえた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3276ba/>

異世界召喚された道化師（ピエロ）

2012年1月10日19時57分発行